

スポーツのこれからを描く

平 尾 剛

本学科が10周年を迎えた2018年度は、体育・スポーツ界がその方向性を定める転機の年として私たちの脳裏に刻まれると思っている。

ご存知のようにこの2018年は競技をまたいでいくつもの不祥事が明るみに出た。日本大学アメリカンフットボール部における危険タックル問題を皮切りに、相撲界では力士間の暴力事件から協会内部の確執にまで発展した。体操界では師弟間の体罰に端を発して協会内部の偏った権力構造が浮き彫りになるなど、各問題あるいは事件が各メディアを通じて世間を賑わせたのは記憶に新しい。

これら一連の不祥事を「まさかこんなことが行われていたなんて」と、青天の霹靂のごとく感じた人は少ないだろう。「やっぱりそうだったか」あるいは「そういうことってありうるかも」と、薄々は感じていた人が大半だったはずだ。2012年に桜宮高校バスケットボール部での、顧問の体罰により生徒が自殺するといった悼ましい事件が起きたことが思い出され、「まだ続いていたか」と落胆する人もいるだろう。

スポーツ界には言葉のそれを含む「暴力」が未だ根強く残っている。この厳然たる現実をあらためて再認識させられたのが2018年だった。悲しみや怒りを禁じ得ないのが私の素直な気持ちである。

これとは反対にグッドニュースもあった。

2019年1月25日、プロ野球横浜 DeNA ベイスターズの筒香嘉智選手がアマチュア野球の指導方法に関する記者会見を行った。指導者の暴言や罵

声、長時間にわたる練習、過密な試合日程など、子どもを取り巻くスポーツ環境に疑義を申し立てた。旧態以前の指導方法がまかり通る極めて保守的な野球界から、このような発言が為されたことの意義は大きい。

また、言葉を含む「暴力」を、あってはならないことだと前置きしつつも結局のところ容認する態度を示すスポーツ経験者が多い中で、現役のトップアスリートが公の場で発言したことは注目に値する。過去に指導者の「暴力」に耐え抜いたからこそ今の自分がいると捉えている同僚が多い中で、こうした発言をするには相当な勇気が必要だったと推測する。

さらに筒香選手は、ボーイズリーグ加盟の堺ビッグボーイズという少年野球チームの副代表を務め、多忙な日々の合間を縫って現場に足を運び積極的に子供たちと接している。プロの世界という高みから高説を披瀝するだけでなく、現場感覚を持ち合わせている点でも彼の発言には重みがある。

「新しい時代に対応して変わっているスポーツもあります、そうでないスポーツもあります。僕は野球をやっているのも、その立場から情報発信をしていきたいなと思います。」

表向きには野球人口の減少を解消するという理由がありつつも、それをはるかに超えて彼の視野は他のスポーツに向けられている。

今季から米大リーグのシアトルマリナーズに移籍した菊池雄星選手は、すかさず彼の呼びかけに反応した数少ない一人だ。この発言を他人ごとと

せず、自分も続かなければならないという趣旨の発言をしている。彼に倣い、本学科もこの潮目の変化を逃さずスポーツのこれからを創出していく学生たちへの教育に真摯に向き合わなければならない。

指導のあり方や社会的な役割など、スポーツのこれからを描くこと。これが10周年を迎えたジュニアスポーツ教育学科に与えられた使命であると私には思われる。